

子宮頸がん予防教育 タイで3年事業に着手

PHJは07年11月からタイ北部チェンマイ県での子宮頸がん予防教育事業に着手しました。この事業はPHJがタイ中央部2県で6年間行った同病の予防教育を横展開するもので、タイ保健省、大学等とタイアップして今後3年間実施するものです。(予算総額は1100万円)

「子宮頸がん」はタイ国民病とも言われ罹患率も高く、死亡率も高い(タイ全体では10万人に6人が死亡、チェンマイ県では10人、日本では3人)。この病気は予防検診による早期発見が可能かつ効果的であるにもかかわらず、これを受ける人が非常に少ないのが現状です。その理由は、①保健教育が不十分のため病気の脅威や予防検診の有効性を知らない、②検診内容や費用を知らず敬遠する、③検診場所が遠く交通費もかかるため検診に行かない等です。

そこで今回検診率の低いチェンマイ県のうち2郡全域について30—60才(タイ政府による危険ゾーン指定)の女性40000人を対象に予防教育を実施します。対策としては①2郡全24ヘルスセンターでの検診体制の確立、②地域の保健実務者(看護師、ヘルスボランティア)に知識と実務を定着、③検診結果が陽性の女性は郡立病院での

治療までフォローの三つを柱とし、成果としては3年間で対象女性の50%以上が検診を受ける(従来この地区では9%)を達成します。

今回やり方の特徴は、人口密集地域を選び、かつ対象女性を危険ゾーンに絞ったこと、また地域の保健コーディネータ(ビレッジヘルスボランティア)を全員動員して対象女性への呼びかけを強化すること、さらにモニタリング(PHJ及び保健所要員主催の評価ミーティング)回数を増やして村ぐるみで予防検診プロジェクトに取り組むこと等です。これにより先に6年間で達成した検診率50%超という成果を3年で達成することを狙っています。

子宮頸がん検診は、予防検診による病変補足率が高く、早期発見と治療による治療率が高いので効果的な事業になることを期待しています。



(大河内)

ヘルスボランティアへの教育

巻頭言 / 世界の地域格差を減らす努力



ピープルズ・ホープ・ジャパン
理事

松本 謙一

サクラ精機(株)
代表取締役会長

●はじめに

平成19年秋の叙勲で私は知らずも「旭日中綬章」を受章しました。身に余る光栄でこれもひとえに皆様方の日頃のご指導ご鞭撻の賜物と心から感謝申し上げますが、その一端に「ピープルズ・ホープ・ジャパン」「(財)国際医療技術交流財団」「海外医療機器技術協力会」等を通じての私のささやかな海外貢献活動も認められたことかと思ひますと、真に感慨無量なものがあり、これを機に更なる努力を誓った次第です。

●誠心誠意の対応が一番

先ごろ小泉純一郎元総理にお会いする機会がありました。その折こんな話をお聞きしました。「私は先日ベトナムへ行ってきた。数ヶ月前に日本のODAでつくった橋が壊れてベトナム人のみ(日本人は皆無)が百数十人死亡した

旨を聞いていたのでとにかく先ずは心から謝った。恨み怒られると思いきや現地の人々は『故意に悪いものを造った訳ではないことは十分に判っている』とむしろ暖かく迎えてくれた。こういう国をこそ日本は今後更なる理解を深めていくべきではないか」と。

●世界の地域格差を縮めたい

- 1) つい先日、日本ではヨーグルト位しか知られていないがその実、大へん古い歴史と遺跡をもつブルガリアの首都ソフィアに行ってきました。まだ決して豊かとは言えないこの国に日本の徳洲会が1千床の病院を建て現地の人々に大喜びされている様子をこの目で確めて我が事のように嬉しく思いました。
- 2) 世界銀行統計(2005年)によると、「1日1ドル未満で暮らす人の比率(1993~2003=%)」はアフリカは45%、南アジアは33%、後発開発途上国41%、世界平均は21%の由(日本は豊か過ぎて数字にもならない)。ちなみに、1人当り総所得(USドル)は日本のそれが38,950に対し、アフリカは746、南アジアは692と50倍からの差となる。今後もピープルズ・ホープ・ジャパン(PHJ)の活動等を通じて世界格差の縮小に努めたいものです。

タイ活動報告 HIV/AIDS感染予防教育事業

● HIV/AIDS 感染予防教育事業

この事業はタイのチェンマイ市で行っているのですが、ベトナムへの水平展開をしています。ホーチミン市の医科薬科大学の学長との契約をすませ、学生たちへの教育をスタートしました。

9月14-17日には、マスタートレイナー養成コースを開催し、ホーチミン大学からの2名を含め29名が受講しました。



養成コース開始セレモニー

● HOPE パートナープログラム

プログラムは順調に推移しており、この三ヶ月間に5名が元気になり、卒業しました。残念なことに、一名は



テスト受講風景

亡くなりました。健康教育は患者の両親に対して引き続き行っています。教育結果の評価はテストで確認しますが、平均点は90と満足のいく数値に

なっています。また、子供たちのメンタルケアと簡単な整体治療を兼ねた絵画教室も行っています。

● 小児先天性心臓手術支援

今年は、10名の心臓疾患の子供たちの手術を予定していますが、そのうち4名の手術が無事に終わりました。

(蓮見)



Warunya



Waraporn



Sunisa



Apiwa

カンボジア活動報告

こんにちは！カンボジアは11月から乾季に入り、あちこちで一斉に稲刈りが始まりました。11月から2月にかけての時期は、結婚式が行われる時でもあります。多くの町や村で、自宅の軒先を囲うようにテーブルが並べられ、結婚式の宴席が執り行われている様子を見ることができでしょう。このような続々と誕生する新婚カップルが気軽に行けるような診療所づくりを目指したいと思います。

カンボジア事務所では、3年プロジェクトの終了を受けて、終了時評価を行いました。これまで一緒に活動してきた診療所の保健員や村のヘルスポランティアさんへの聞き取りや村での調査で、どのような効果が上がったかを調べました。その結果、妊婦健診を受けた村のお母さんたちの人数がとて多くなり、母子保健に対する意識がとて高くなったことが分かりました。診療所の助産師さんのサービスも良かったと評判でした。

あるヘルスポランティアは、3年前の苦労をこのように語っています。「以前は、村での破傷風等の予防接種活動があっても女性たちは注射を恐れて逃げていました。いくら説得しても、女性たちを呼び集めることは大

変でした。また、子供にも注射を打たせてもらえません。注射の後に具合が悪くなるのではないかと恐れているのです。保健教育のおかげで、

予防接種の意義を理解し、今では、自分たちから集まってくれるようになりました。」(破傷風は母親と子供を対象として予防接種が行われている。)

このように、村での保健状況を良くしていくには、ヘルスポランティアをはじめとする村人の協力は欠かせません。村人が正しい保健の知識をもつことが健康な生活への第一歩なのです。

今年より、同様の母子保健改善を目指したプロジェクトを新しい場所で始める予定で準備を進めています。これまでどおり、応援よろしく願いいたします。

(中田 好美)



村での聞き取り調査

インドネシア Gianyar 病院におけるボランティア活動報告

聖マリアンナ医科大学病院 画像診断センター 診療放射線技師 吉川 達生

2007年6月17～27日、インドネシア、バリ島のGianyar病院にCTの教育指導のため出張しましたので報告いたします。PHJは2006年2月に中古のCT装置をGianyar病院に寄贈、その後Gianyar病院の医師を日本招聘し研修教育を実施、また日本の医師を現地に派遣しましたが、なかなかうまくCTを使いこなせずに困っていました。そこで、PHJの理事である当院放射線医学教室中島教授に相談したところ「じゃ、うちの技師を派遣しましょう。」で急遽、私の出番となった次第です。

バリ島は世界屈指のリゾート地、日本人も数多く訪れます。しかし、Gianyar病院は町から車で1時間半ほどいった山の中、滞在中は日本人をひとりとして見ることはありませんでした。病院は3階建て、中庭もあって緑も多く、床は白のタイル張り、壁は白色のペンキが塗られ明るい感じで私の想像とは異なり、外観は清潔感さえありました。しかし、病院見学では驚かされることはいっぱいです。一部を記載します。



病院内(白壁・白床)

ICU(集中治療室)…ベッドは6つ、心電図モニターで24時間管理していることを自慢していましたが、見たところモニターは2台しかありません。ガウンテクニックもなく、履き替えた履物は、ビーチサンダルでした。

NICU(新生児集中治療室)…保育器は6つ、うち5つは故障していました。「赤ちゃんをどのようにして暖めるのですか?」と訊ねると、「白熱灯をかざして暖める」と言うことです。

X線装置…私も見たことがない30年前のフランス製の装置、カセット(フィルムを入れるケース)は2枚しかありません。しかし、レントゲン撮影はとてもうまくて、うちの若い技師達に見せてあげたかったです。



30年前のレントゲン装置

CT装置…今回寄付した装置は15年前の旧式で日本では殆んど使用されておられません、インドネシアでは高価な医療器械として大事に使われております。日本では年間2,500台ものCT装置が更新され、殆んどが産業廃棄物になりますが、このようにもっと有効活用されないものかと感じました。

食堂…ねずみがウロチョロ、驚くと笑われました。人間とねずみが共存共営、昼食はここでいただいたのです

が、一度おなかをこわしました。

インドネシアは3年間の技師学校での教育を済ませ、放射線技師のライセンスを取得します。しかし、CT



食堂

とMRIはカリキュラムには含まれていません。当然、CTの操作・検査についてはまったく知りません。CTの教育指導は、CT画像の成り立ちから説明、患者の扱い方、検査の進め方など初歩の初歩から指導しました。私は日本の技師学校で非常勤講師をしていますが、日本の学生は授業をサボることしか頭にありません。しかし、Gianyar病院の技師さんからは、真剣に覚えようとする意欲を感じました。目の輝きが違います。彼らなら数ヵ月後には、きつとうまくいくと確信を持ちました。



CT研修(中央:吉川技師)

私が強く感じたことは、現地には「教える人(先生)」がいないことです。高価な装置を寄贈しても有効利用してもらわないと苦勞のしがいがありません。ハードとソフトの供給のバランスが大切で、教育指導については継続的な支援が必要です。

ボランティア活動は、少しだけお金が掛かり(渡航費用はPHJ負担、他は自費参加)、少しだけ大変な思い(言葉、食べ物)をしますが、日頃は経験できない満足感



CT研修

と充実感を味わうことができます。私は、とてとても楽しい時間を過ごすことができました。

今回、貴重な経験を与えてくださった上司、PHJスタッフの方々に深く感謝し、今後のPHJの活動に期待いたします。ありがとうございました。



救急棟の医師たち

会員のひろば



多くの人に支えられて

岡田 幹雄

(個人会員・パートナー会員)

私がPHJの会員になったのはいつのころか覚えていない。かなり昔のように思う。当時は健康そのもので、「医療援助を通して社会貢献できれば。」と、いった程度の軽い気持ちであった。

ところが2006年の初夏、医師から「かなり進行した食道癌に侵されている。」と告げられた。

放射線照射、抗がん剤による治療の後、ようやく外科手術が可能になり、転移した部分も含め、癌の摘出ができた。麻酔からさめ、朦朧とした意識の中で集中治療室の看護師さんに時間を聞いた時、手術は途中で中止されることなく最後まで行われたことを知った。

医療援助に参加しているつもりであったが、逆に医療の援助が必要になってしまった。

自分の人生はロスタイムに入ったのか、仕事も止めようかと考えていたとき、「お父さん。まだまだ後半戦が始まったばかりですよ。」と、妻に言われ人生の後半戦に再び踏み出した。

そして、自分の生きていく目標は一人の子供の幸せを願い、一緒に病氣と闘うことだと考えパートナー会員になることを決めた。パートナー会員になることを

妻に話し、「もし癌が再発したときもパートナー会員を続けてくれるか。」と聞いた時、「そんな心配は要りませんよ。」と、賛成してくれた。

PHJの活動と同じように、私も多くの人々に支えられて生きている。毎日健康のために人参ジュースを飲んでいることを知った近郊の朝市の農家のおばちゃんたちが、そっと店の裏から「とっておいたよ。」と出してきてくれる人参。天然水販売所のお姉さんが「元気になったね。」と、注ぎ口からあふれそうになるまで水を注いでくれる、ちょっとした好意。

PHJを通じて、「社会貢献をしている。」といった気負った感覚は今はない。自分も人々のおかげで生きることができると感じ、感謝している。

またチェンマイから送られてくる子供の様子を伝える手紙と写真から、現地スタッフやボランティアの方々の地域に溶け込んだきめ細やかな活動にいつも感動させられている。

新しい年を迎え、子供の状態が改善することと私自身が元気で生活できることを目標に今日もISO9001の審査の仕事に励んでいる。

そして、今年のもうひとつの目標は、チェンマイの子供に会い元気な姿を見せることである。

幸運にも退院後一年以上を経過した今も、「転移、再発の兆候無し。」と診断されている。

グローバルフェスタ Japan 2007参加

今年で17回目となるグローバルフェスタ Japan、10月6日の「国際協力の日」を記念して開催される国内最大級の国際協力のイベントです。今年も10月6日と7日の週末、東京は日比谷公園にて開催され、PHJは今年も参加しました。

私たちPHJがタイ、インドネシア、カンボジアで活動している様子を現地からの写真や活動で使っている教材を展示し、来場者に説明しました。将来国際協力分野で働きたいという学生や看護師さんからは、国際協力について具体的な質問やコメントも頂きました。

来年も10月上旬開催の予定です。私たちPHJの活動を詳しく紹介していますので、是非、日比谷公園まで足をお運びいただければと思います。(石関)



運営委員会報告

11月19日第32回運営委員会が横河電子機器(株)様会議室をお借りして行いました。

テーマは支援事業の現地報告と予算の報告です。

現地報告はタイより大谷暁子がAIDS予防教育センター・カンボジアより中田好美が新規事業の調査進捗をインドネシアからは伊藤美夏が母子保健、予算は須見代表より募金状況についての報告がされ各委員より活発な質問と貴重な意見、アドバイスから事業報告の承認をいただきました。

(三木)



今日からあなたも地球人 個人会員・ホープパートナー会員募集中!

FAX 0422-52-7035

ピープルズ・ホープ・ジャパン 行

個人会員申込書 会費3,000円/年・口× 口 = 円/年

ホープパートナー会員申込書 会費3,000円/月

の中にチェック☑を入れて下さい。

ふりがな

氏名

電話

自宅住所 〒

勤務先

電話

お申込みは、郵送、FAX、ホームページなど、どのような方法でも、結構です。後程送金方法を連絡させていただきます。

発行：ピープルズ・ホープ・ジャパン / 発行責任者：須見 彰 / 編集人：三木 巖 / 発行日：2008年1月1日

〒180-8750 東京都武蔵野市中町2-9-32 TEL：0422-52-5507 FAX：0422-52-7035

E-mail：info@ph-japan.org インターネットホームページ：http://www.ph-japan.org